

Montage 現象の意味論

高 橋 孝 二

(英語学研究室)

(昭和50年4月28日受理)

Bach (1974) も指摘しているように、変形生成文法理論内での二つの意味論、すなわち、解釈意味論と生成意味論との、深層構造と意味表記のレベルを中心とする論争が現実に見着くことは、今のところありそうにもない。ある言語現象についてそれを説明するモデルが提出され、同一の現象についてこれとは独立して他のモデルが提案されるとき、しばしば 'notational variants' ということが持ち出され、二つの理論を対等に評価しようとする動きが少ないように思われる。経験的に妥当であるということの本質は、文法理論の定式化が現実の言語運用の内実を正しく反映しているかどうかによって決定されるべきであるということにつきる。

本稿は、異なる構成要素が、対立しつつからみ合いながら、連続的に結合して、統合された単一の全体像を形成するに至る一つの意味内容 (semantic reading) としての montage 現象を把握する意味論を、従来の意味理論の検討の上に構築しようとするものである。この考察は、当然ながら標準理論のわくぐみを超えるものであり、構成要素及びその意味素性の変形の過程に見られる Network の実相を、解決されるべき問題の一つとして残されている主要部 (head) という文法関係を中心に置いて明らかにしようとする。文学理論と文法理論との境界にあるこの問題の掘り下げは、言語学からの文体論に一つの方向を与えてくれるに違いない。

1

Katz & Postal (1964) に組み入れられ、Chomsky (1965) に一つの刺激を与えた Katz & Fodor (1963) の意味論 (以下KFと略記) の本質を、特に投射規則 (projection rule) の最近の発展と共に再考することから論を進めよう。KFが主張した意味理論の目標ないし枠組みは次のようなものであった。

(1) Standard Semantic theory

- (a) 意味部門は creative でなく、基底の統語構造を意味表記に translate する働きをするという点で解釈的 (interpretive) である。
- (b) 意味論の domain は、話者の解釈能力を、文 (a sentence) の読みの数とその内容を決定するメカニズムを記述説明し、意味上の変則性 (anomaly) を検出し、文と文との間の言い替えの関係 (paraphrase relations) を決定し、他の意味的役割を果す property を指定することによって解明することである。
- (c) この場合、扱う範囲は個々の文 (sentences in isolation) に限定される。
- (d) 統語部門が説明を保留している文の意味解釈に必須の morphemes を与える部門として、辞書 (dictionary) を含む。

The tiger bit me. / The mouse bit me.

この辞書項目エントリーには、語い項目の品詞分類を与える部門と、語い項目そのもの

が持つ辞書の意味の部門とがある。

- (e)語い項目の意味を、極小の意味概念にdecomposeする手段として、意味標識 (semantic marker) と弁別要素 (distinguisher) を用いる。(d)の文法標識 (grammatical marker) と共に、例えば'honest'の辞書は次のような経路をとることになる。

'honest' → Adjective → (Evaluative) → (Moral)

→ [innocent of illicit sexual intercourse] [(Human)and(Female)]

- (f)ある一つの文とその構造記述が意味論へのinputを提供する。その文の意味解釈がoutputとなる。文の十分な文法記述と辞書がアマルガムを形成しつつ、全文の意味の組み立て構造を明示的に示す規則が投射規則である。

- (g)第一型の投影規則へのinputは句構造標識であり、そのnodesの当該の下位節点には、すでに辞書部門によって一組のreadingsが付与されているが、それらを支配している節点には読みが与えられていない。この規則のoutputは、inputとしてのP-markersと同一の句構造ではあるが、下位節点(N₁, N₂, ..., N_m)から成るQを直接支配しているnode(N_m+k)に一組の読みが割当てられていて、Qの各成員は読みの選択の機能を果しているという点が異なる。(contextの中で各語いのambiguityが整えられる。)

このような投射規則の実体は何であるかについていろいろと論じられて来たが、Weinreich (1966)に従って検討を加えれば、次のように要約出来る。

- (d)KF意味論の扱う範囲がきわめて狭い。(そのため、このままでは文間意味論に及ばない。)

- (b)意味標識(SmM)が選択制限に従いながら一つの経路を通して行く時、意味の化合(amalgamation)が行なわれるが、弁別要素がこの意味論でモデルとしての地位を与えられていない。(投射規則は変形であるというその後の主張も、このままでは説得力を欠く。)

$$\begin{array}{l} \text{SmM}_1 \rightarrow \text{SmM}_2 \begin{array}{l} \nearrow \text{SmM}_3 \\ \searrow \text{SmM}_4 \end{array} \quad (e \cdot g \cdot \text{SmM}_1 \rightarrow \text{SmM}_2 \rightarrow \text{SmM}_4) \end{array}$$

- (c)SmMをcategory symbolとfeature symbolで示しても、語類の推移(class shifting)を提示し得ない。(この点は派生名詞(derived nominals)の問題につながる。)

- (d)意味上の標識と統語上の標識との区別が明確でない。

- (e)一つの経路(path)の終端記号には統語標識や意味標識が割当てられていて、この記号連鎖そのものが、適切な語い項目の採用を条件づける機能を持つとするが、同一のmarkerを持つ主要語(head)にのみ修飾語(modifier)が付き得るという議論は弱いものであり、ある語Zの選択素性が、Zと何らかの構造を成す他の語Wのpathに転移ないしは乗り換え(transfer)することを許すモデルを考えるべきである。

Katz (1966)の意味論でも、主要部—修飾部という関係概念を必須の情報として用いている。

投影規則(R1)は、形容詞と名詞、副詞と動詞、副詞と形容詞等のmodifierとheadという文法関係を扱うものであるとし、修飾(modification)の意味規則を次のように組み立てている。

(2) R1

今二つの読み(readings)が与えられた時、

R1 : (a₁), (a₂), ..., (a_n); <SR1>

R2 : (b₁), (b₂), ..., (b_m); <SR2>

R1はnodeX₁に付与され、R2はnodeX₂に付与され、X₁がheadである語連鎖を

支配し、 X_2 が modifier である語連鎖を支配し、 X_1 と X_2 を直接支配する node X から X_1 , X_2 が枝分かれしている構造を成しているならば、統合された読み (derived reading) R_3 : (a_1) , (a_2) , ..., (a_n) , (b_1) , (b_2) , ..., (b_m) ; が、二つの選択制限 $\langle SR_1 \rangle$, $\langle SR_2 \rangle$ が合致した場合に、node X に与えられる。

しかしこの場合、主要部・修飾部があらかじめ規定されていて、関係概念そのものの決定がなされてはいない。

(f) 統語構造が意味解釈に及ぼすメカニズムは観念連合 (associations) ではないのであり、意味解釈の経路の立て方に問題がある。(cf. 後述の Network モデル)

(g) 第二型の投影規則 (PR2) の存在理由は既にないが (Chomsky 1965) , KF の第一型の投影規則 (PR1) は、その適用の条件、その効果が一律でない。

「～の主語」: $[NP, S]$, 「～の述部」: $[VP, S]$, 「～の目的語」: $[NP, VP]$, 「～の主動詞」: $[V, VP]$ 等の文法関係が自動的に供給される句構造標識は、先にふれたように、head や modifier の一般的定義を同じように与えてくれる方式ではない。Weinreich の批判(g)もこの点を指摘している。

Chomsky (1970) が提唱した派生名詞をめぐる語彙論的仮説の中の「基底式型の仮説」は、次のような現象の画一的な定義の志向にあったと考えられる。

(3)(a) 句範疇 (phrase category) である Complement は変形に何らの役割も果していないので(そのような範疇記号に言及する変形規則が知られていないので)、次のような羅列的補部表現、 $NP \rightarrow N \text{ Comp}$, $VP \rightarrow V \text{ Comp}$, を捨てて単一の $AP \rightarrow A \text{ Comp}$ 基底式型 (schema) で示す。 $\bar{X} \rightarrow X \{Y_1 \dots Y_n\}$ に於て、

「～の補部」 (complement-of) : $(\{Y_1 \dots Y_n\}, \bar{X})$

(b) 文法関係を定義するための記号 (式型) を基底の句構造標識に直接導入することにより、Chomsky (1965) の主張を変更したのは、表面構造からの意味解釈をも許す「拡大標準理論」に組み入れようとしたからであると思われる。

「～の主要部」 (head-of) : (X, \bar{X})

「～の修飾部」 (modifier-of) : (spec, \bar{X}) , \bar{X}

一般に、「基底式型の仮説」の意図するところが何であるかについて十分明らかというところまで行っていないのであるが、この仮説が NP, AP, VP のような構造の持つパラレルな本質を統一的に把握することを可能にする時、表層での音韻現象としてのフランス語の Liaison をも統一的に解明出来ることを示した論文が発表されて来ている。Selkirk (1974) は次のような再調整規則 (readjustment rule) を提出している。

(4) X-Comp 規則

屈折する主要語 (head) の名詞・形容詞・動詞は、それらの補語 (complement) の領域に接続している語とリエゾン文脈 (a liaison context) を構成する。

この規則は、統語構造レベルでの抽象的仮説が、音形論にも有効であることを立証するものである。(3)の統語論での式型は次のようにまとめて示されている。

(5) 基準構造 (Canonical Structure)

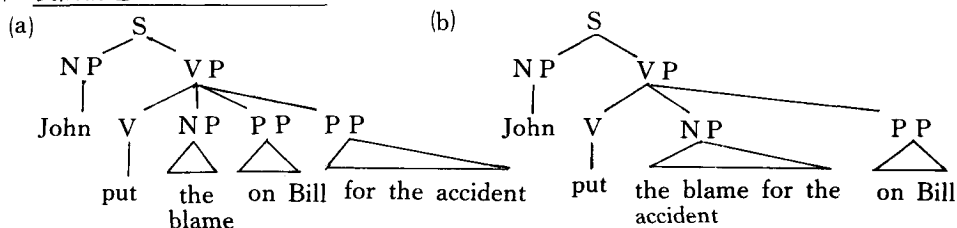
(a) $\bar{X} \rightarrow X \{S, PP, NP, AP, VP, \text{etc.}\}$

(b) $\bar{X} \rightarrow [\text{Spec}, \bar{X}] \bar{X}$

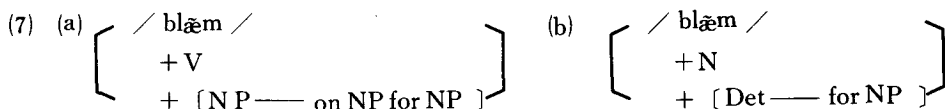
(4)(5)の理論的發展として、意味的モンタージュの文脈を syntax の面からどのように規定出来るかを考察するのが第二章以下の目的であるが、その前にKFモデルの投射規則がその後どのように理論的改訂を加えられて来ているかを見る。

Jackendoff (1974) は、統語上の現象と意味上の現象との discrepancy はそのまま認めるべきであり、Katz 以来の深層構造投影規則が今もって有効であることを、Complex Predicate を例にとって主張している。‘Blame’ Nominals を含む次の二文が PP Shift 適用の後では、互に表面構造を異にしている現象に着目し、主要語 (head) が 〈blame〉であるNPの範囲内に二つの前置詞句 (PP’s) が二つとも含まれることがない事実を指摘している。(b)のNPが一つの構成要素となっている。

(6) 表面構造での Asymmetry



ここでの主要語 〈blame〉の生成過程について既に筆者は検討しているが (1970)、original verb から Copy 変形を経てこの種の成句表現が得られるという立場をとらないで、Jackendoff は(5)の式型を意味解釈にとり入れている。〈blame_V〉と〈blame_N〉との lexical entries は次のように示される。



(7)には、更に複雑意味標識BLAME (NP₁, NP₂, NP₃) が加わり、投影規則の一つである「項置き換え」(Argument Substitution) が適用されることになるが、(7(b))にはNP₁, NP₂ の指定がなされていない。しかし(7(a))とパラレルな意味解釈が成立することから、新規に語目項目を作ることなく、しかも新しい動詞((6)の put the blame) を生成するための規則を次のように立てている。

(8) Complex predicate 規則

主動詞 (main verb) と名詞表現 (nominal) の読み (readings) を、相等しい意味機能を二重焼き付け (superimpose) することによって結合させること。

(8)の規則は(7)の(a)(b)を Montage させようとするものに他ならない。Pro-V に文体的価値以外の意味素性を持たせないで superimpose するこの解釈規則は、先に述べたような文脈ないし scope の概念なしには成立し得ない。意味規定の範囲を、個別の文構造内に限定することから、文間 (discourse) にまで拡大させるための基本的理論として、意味素性の転移の仮説をまとめておこう。(1)(e)

(9) Transfer Features (Weinreich 1966)

今、構成要素M (a, b →) とN (c, d) が辞書エントリで定義されていて、M+N が繰り込み構造 (nesting construction) である時、M+Nの意味は (a, b → c, d) で示される。このM+Nの組み立てが生じる時、転移素性〈W〉がMに現われ (c, d) とクラ

スターを成すことがある。これを図式的に示せば、

a) $M(a, b \rightarrow \langle w \rangle); N(c, d)$

b) $M+N(a, b \rightarrow c, d, w)$

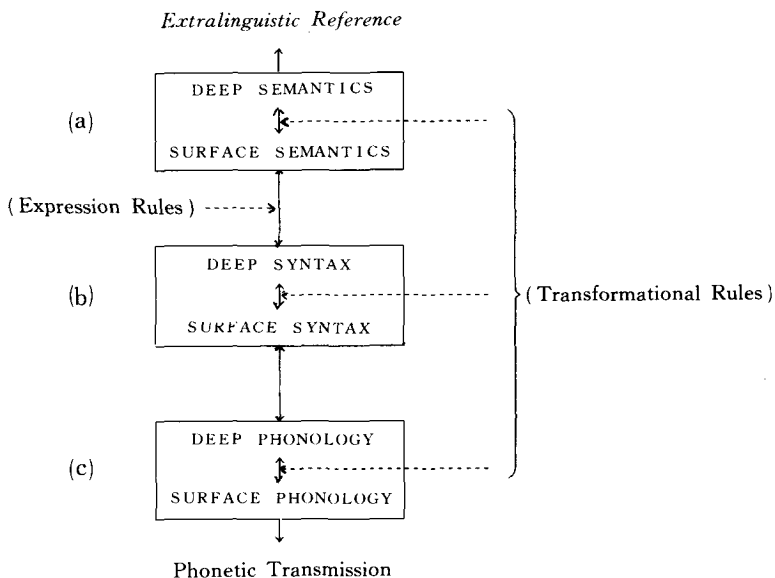
となり、Nが $\langle w \rangle$ を吸収 (absorption) している現象である。

ある素性Fに関して、適正文脈 (proper context) が無指定である場合、辞書項目そのものに内在する素性Fがこの文脈を意味的に指定するとするこの仮説は上の(8)の規則と酷似している。問題は、適正文脈をどのように規定するか、その理論を発見することである。

2

Leech (1974) の提出した「深層意味論」 (Deep Semantics) は、解釈・生成両意味論よりも表記レベルを多くしている。言語の全構造に、レベルとしての釣り合いを与え、文法変形としては主題 (theme) を強調するための要素の移動変形 (movement) に限っている。

(10)



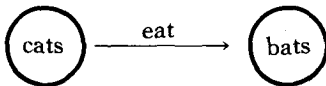
(10)の(c)部門は本稿の考察の対象外であるが、(b)のDEEP SYNTAXは、Chomsky (1965) に類似している。すなわち、

- ① 語い項目が挿入されるレベルである。
- ② 統語上の下位範疇化が行なわれるレベルである。
(選択制限は(a)部門で行なわれる。)
- ③ 統語上の変形が発覚する。
- ④ 主語・目的語等の関係概念が規定される。

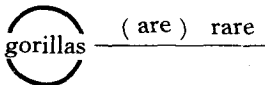
(a)部門がKF意味論と決定的に異なるのは ((1)の(a)) この部門に独自の基底部 (base) を持たせることによって生成能力 (generative capacity) を与え、同時に適格条件 (structural 'conditions of well-formedness') を負わせているところである。深層意味表記は、句構造によって与えられるのではなく、'links' と 'termini' の枝 (branches) から成る「網目」(Networks) によって示される。

(11) Leech の Networks

- (a) 2項述語を持つ意味表記は二つの termini が一つの link によって結びつけられている。

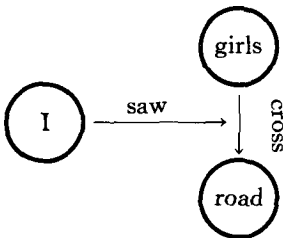


- (b) 1項述語の場合は只一つの terminus だけが一つの link によって支えられている。



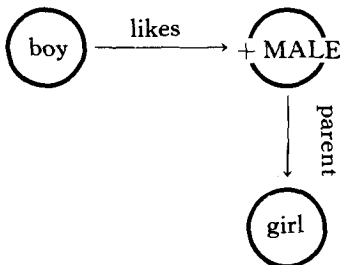
(ここで、Ross (1969) の John is guilty の深層構造を John is [_{NP} [_S John guilty]] と分析したことと比較すべきである。)

- (c) 一つの陳述 (predication) が他の陳述に埋め込まれた場合、枝は他の枝とT字型に接合され埋め込まれた陳述が一つの terminus となる。



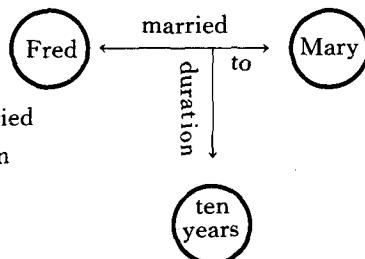
'I saw (the) girls cross (the) road.'

- (d) 他の陳述の項の中に格下げの (downgraded) 陳述 ((b)レベルでの前置詞句に相当) がある場合、二つの枝が一つの terminus を共有している形で示される。



'The boy likes the male parent of the girl.'
i. e. 'The boy likes the girl's father.'

- (e) 述語の中に格下げの陳述がある場合。

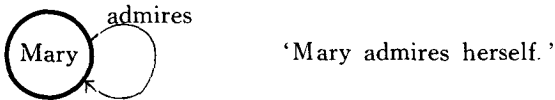


'Fred was married
to Mary for ten
years.'

(f) 同一指示 (coreference) はこの最深レベルに存在せず、閉じた網目によって示される。



(g) 再帰的關係は最も単純な閉じた網目を持つ。



かくしてより複雑な network を組み立てることも出来、表層意味表記で統語表現形式にまとめられるとする。次に深層構造に至るレベルで適用される (意味論と統語論をつなぐ) 「表現」規則 (expression rules) について吟味する。(この場合「翻訳」規則であってもかまわない。)

(12) Expression Rules

(a) 語い化 (Lexicalization)

統語的に操作できるように、一組の意味素性に語を割当て、その語の中に一定の意味内容を package する。

(b) 構造の圧縮 (Compression)

成分構造の複雑度を減ずる。照応表現はこの規則で生成される。

(c) 線化 (Linearization)

成分構造に方向性を与える。

(d) 主題化 (Thematization)

重点・強調を受ける成分を適切な位置に配置換えする。

Leech のこの意味モデルは、まだその輪郭を提示した段階であるとはいえ、多くの難点があると言わなければならない。Katz (1971) が Postal (1970) の remind 分析を 'Collection' 変形として批判した論点は、そのまま、一層根本的に Leech のモデルにも向けられると思う。言語理論に要請される完全な定式化 (formalization) のためには、既に提出されている本質的に homogeneous な理論を吟味しつつ採用する方が、各モデルの algorithm にとっても望ましいと考えられる。

規則(12)の意味論と統語論を map しようとする仕組みは、これまでに提出されている仕組みと比較する時どうなるであろうか。標準理論の語い挿入 (lexical insertion) に課せられている「分析可能」と語的変形としての「代入」と(12)の(a)、(c)、「代名詞化」と(12)の(b)、更に消去変形 (deletion) との関係はどうなるであろうか。もし、統語モデルを意味構造に持ち込もうとするのであれば、現在の生成意味論がはるかに体系を持ち、また強力であると言える。本稿の目的に沿って(12)の(d)を吟味することにする。

深層における統語現象と意味現象のかかわり合いを格関係 (case relationship) として規定しようとする格文法の話題化 (Topicalization) は、文中のある構成要素を遊離させるか、focus としてきわ立たせることによって単なる強調以上の効果を持たせようとするものである。一次話題化としての主語化 (subjectivalization), 二次話題化としての表面構造における構成要素の移動現象は、主題となるべき要素が本来的には無指定であり、中立の状態にあることを理論の前提としている。この主要語が名詞句である場合、Ross (1967) は次のように定式化している。

- (13) X — NP — Y (Ross, 4. 185)
 1 2 3 optional
 2 ≠ [1 ϕ 3]

(13)適用には「左枝条件」、「上限・下限制約」等いくつかの制約も提出されているが(12)の(d)には言明がない。規則(13)の ≠ の記号は、この操作が「チョムスキー付加」(Chomsky adjunction)であることを示すものであるが、現在の筆者にはこの付加操作が、先の適正文脈を造る最も優れたモデルであると思われる。同一の句構造標識に含まれる二つのnodes の間に成立する関係の中で重要なものを整理すると次のようになる。

(14) 結節間の関係

- (a) 「～の左にある」「～に先行する」(precede)
 (b) 「～を(直接、あますところなく)支配する」(govern)
 (c) 「～と構造を成す」(in construction with)
 (d) 「～を統御する」(command)
 (e) 「～と同節要素である」(clause mates)
 (f) 「～と同位要素である」(peers)
 (g) 「～より優位である」(superior)
 (h) 「～に下接している」(subjacent)

左の結節間の関係について、この中のいくつかについては既に紀要論文その他で論じているが、主要部(head)の生成に関して重要な理論上の可能性が(b)の検討を要求している。その方向は、ある句のみを余すところなく

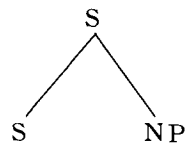
支配している結節が刈り取られる時、主要部がその前に削除されていなければならないという規約に求められる。(複雑名詞句制限も同じ規約)

(14)の各配置構造(configuration)は、さまざまな変形操作に制約(条件)を課すことになるが、この配置そのものを生成する変形がチョムスキー付加によって定義されることを示したい。一般に下位ないし娘付加(daughter adjunction)は構成素構造を分解する傾向を持つが、チョムスキー付加(以下CAと略記)は、これを保持する傾向を持つとされる。つまり、もとのnode にはそのままの構成要素を保持させておき、もとのnode と同一のnode を新たに作って(headとして)、それに支配させるようにする操作である。(8と比較)例えば次例は主要語(head)の生成プロセスでもある。

(15) Complex NP Shift (cf. (18))

- SD : X, NP, Y
 SC : 1 2 3 OPT
 1 0 3 + 2

この変形にCAが枠組みを与えている。(右方転位も同じ。)



(16) Wh - Q Movement

(a)の派生構造(b)はCAによって与えられる。

- (a) Who will $\begin{Bmatrix} \text{john} \\ \text{he} \end{Bmatrix}$ select ?

- (b) [_s who [_s will NP select _s] _s]

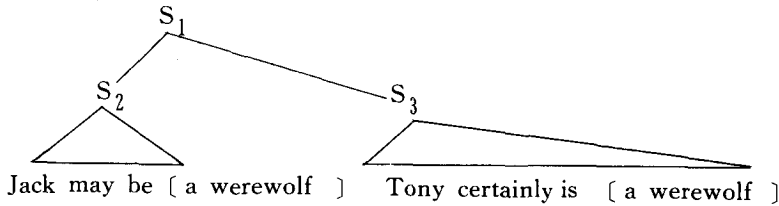
(17) not - initial NP と副詞前置

- [_s Under those conditions, [_s not many doctors will volunteer _s] _s].

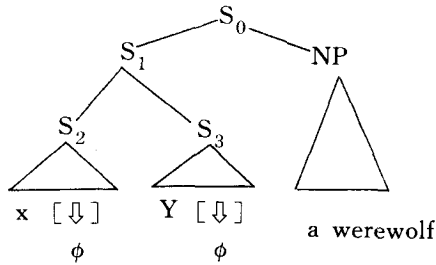
(18) Right Node Raising (RNR)

この規則は(a)から(b)を生成するものであるが、引き上げられる要素は構成要素であること (constituency) が義務づけられる。(Postal 1974, 4.8) (しかし逆は成り立たない。)

(a)



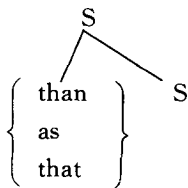
(b)



Bresnan (1974)によれば、RNRはNPのみに適用されるのではなく、Sにも適用される。

〈 than 〉、〈 as 〉、〈 that 〉 節の適正成分構造は次の(c)と考えられる。

(c)

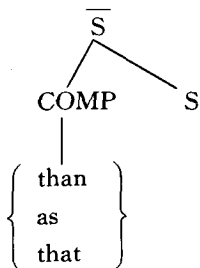


(c)は、全体がS構造であること、と同時に { } 内の構成要素を除いた節もSの status を保持していることを説明している。

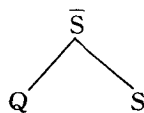
(例) Tell him no more than, nor even all that, he'd like to know.

ここで注目しなければならないことは、前述の基底式型の仮説 ((3)、(4)、(5)) が基底構造を正しく規定するという事実である。(c)は(d)と表記され、(16)にも適用される(e)。

(d)



(e)



これまで、構成要素間の配置構造を規定する仕組みを一律に提供するCAモデルを検討したが、次章の、Montage 現象を統語的に説明するための contexts は、これによって与えられることになる。Leech の意味論はその定式化に弱点があり、モデルそのものが random 現象になっていると言わなければならない。

3

関係節を形成する変形モデルには、‘matching’ analysis が標準と做されているが、‘headless’ な分析もまだ検討を待っている。(14)の(b)に関して言えば、次の(b)が非文法的なのは、生成された主要語(=先行詞)だけが表層に残り、この head を分出した構成素が削除されてしまっているからであると考えられる。

(19) (a) The headway that I made on my thesis pleased my adviser.

(b) * The headway pleased my adviser.

Copy 操作によって、ある構成要素が焦点摘出 (Focus extraction) を受けて主要部を生成し、その配置がチョムスキー付加に合致する構造を、仮に局地的モンタージュ現象と呼ぶことにする。ある作品の imagery が最終的に合成 (conflation) される過程を、文体論としての Montage 現象と呼び、局地的現象を発表させる理論を研究するのがこの章の課題である。

一般に、モンタージュと呼ばれる現象には、次のような特徴があると言える。

- | | |
|---|-------------------------|
| (20) (a) [+ separate situations] | } (Montage への input 特徴) |
| (b) [+ each rounded and complete in itself] | |
| (c) [+ detachment by identification] | |
| (d) [+ juxtaposition] | } (Montage 操作) |
| (e) [+ contrast] | |
| (f) [+ controlling] | |
| (g) [+ coherence] | } (Montage の output 特徴) |
| (h) [+ structured] | |
| (i) [+ dynamic climax] | |
- [+ cutting]
[+ network]
[+ totality]

映画理論 (cinematography) で言うところのモンタージュの多くの技巧には、その目的や方法によって、「対照」「平行」「同時性」「ライトモチーフ」等が挙げられるが、言語理論からの接近のためには、(20)の(f)の操作が明確に規定されなければならない。意味を担う単位の意味素性が転移して行くメカニズムを、連続的に生成される主要語を中心に complex images が生み出されて行く semantic orientation を統語的に決定する意味論を、考察する。即ち、‘discourse’の意味構造を、intersentential な意味関係についての constraints について述べることによって考察することになる。

我々は既に(5)の基準構造で、Head の生成は「チョムスキー付加」によって一律に規定されるという、独立文そのもののレベルでの局地的 montage の意味論は持っていると仮定しよう。次の仕事は network のメカニズムを決定することである。

Fauconnier (1971) は、いくつかの global な現象を説明する理論的仮説として次の二つを立てている。

(21) (a) 非拡大結節 (unexpanded nodes) が派生の中で素性を取得する。

(b) 名詞句から他の範ちゅうに属する nodes に指示指数 (referential indices) を copy する規則 (indexing rules) を設ける。これによって同一指示 (coreference) の網目 (network) が統一された形で与えられる。

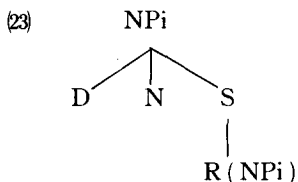
この仮説の適用例として関係詞節の構造を吟味する。一つの記述が関係節として統語的に実現を妨げられる時、それは such—that 節として表面化する。

(22) (a) * The musician who I know the group that belongs to.

(b) The musician such that I know the group that he belongs to.

(ここでは、such-that 節は主要語 (the musician) の転写形としての he を含んでいなければならない。)

(19)との関連で言えば、次のような配置構造 (configurations) すべてに対して、Sは少なくとも一箇の NP_i を含んでいることが要求される。



(23)のSに支配される (NP_i) が、今度は別の構造からCAによって生成されたものと做すならば、このモデルを文間レベルに発展的に応用可能である。作業の方向として考えられるのは、(23)のような構造が、通常の長さの文を超えた表面構造に、濃縮された形で繰り込まれている文

体を吟味し、その解析を通して、一般の文間意味論に向う、という姿勢である。筆者の入手可能なこの方向での文体は Samuel Beckett に求められる。「通常の長さの文を超えた」という意味は、ベケット独特の圧縮した深層的文体のことであるが、その文体の全容は、本稿での基礎的考察の完了の後に、長編の大きさに拡大した「道化の文法」という題目の下に稿を改めなければならない。ここでは、彼の作品に共通する特徴を A. Kennedy (1975) に従って整理しておく。

(24) Beckett の円環構造

- | | | |
|---|----------------------|-------------------|
| (a) [+ separation] | [+ isolation] | } (意味・内容上の chaos) |
| (b) [+ fragmentation] | | |
| (c) [+ incongruity] | | |
| (d) [+ dramatic irony of juxtaposition] | | } (劇的 projection) |
| (e) [+ swapping] | [+ re-arrangement] | |
| (f) [+ perfectly controlled cyclic structure] | | |
| (g) [+ modulation] | | } (表面構造) |
| (h) [+ dramatic syntax] | | |
| (i) [+ breath] | ⇒ (a) | |

驚くべきことは、(24)が(20)の montage 現象一般と軌を同じくしている事実であり、本稿の考察路線での discourse 分析の正しさを支えている。しかし、(20)、(24)の各特徴の [± F] による指示は、このままでは精密さを欠く。各記号目録 (vocabulary) が持つ四つの features (1. category features 2. contextual features 3. inherent features 4. rule features) が混合しているからである。これまでの考察から判明したことは、次の(25)によって示される図式が循環的に適用される、という仮説にまとめられる。

(25) 一つの Montage モデル

(a) Montage I

- ① 主要部 (head) の生成 (この主要部は意味情報上 'topic' である。)
- ② ①の基底構造は「チョムスキー付加 (CA)」によって生成される。

(b) Montage II

- ③ 文の連続体 (discourse) に、②で与えられた配置構造が存在する。
- ④ 主要語である語い項目を支配する結節 (nodes) 間に、意味素性の写

し出し (Copy) が行なわれる。

モデル(25)は、従来の静的 (static) な理論では扱うことが不可能であり、動的 (dynamic) な factor, 例えば「時間」と「空間」の概念を導入しなければならない。文法は locative な項目から temporal な項目を生成するという Anderson (1971) の立場を採るならば、自然言語の持つ表現上の規約の一つとして、生成される head としての NP の「動的性質」を検討しなければならない。

Ross (1973) は、「名詞句らしさ」 (noun-phrasiness) の検証を文法変形の適用資格の有無に求めようとしている。

- (26) (a) $\xleftarrow{\text{More noun-phrasy}} \text{John} > \text{headway} > \text{there}$ (b) $\xrightarrow{\text{Choosier}} \text{TAG FORMATION} > \text{TOUGH MOVE-MENT} > \text{LEFT DISLOCATION}$

これまでの生成文法に内在する個別的とらえ方から連続した現象を扱い得る文法理論への発展は範ちゅうの量化に向うものであり、特定の語い項目に対する規則素性にヒエラルキーを与えようとする試みである。本稿との関連で、(19)で生成された〈headway〉の変形上の許容度を見ると、Tag-formation のみに限られていることが分かる。更に(25)の Montage I によって生成された NP が同一文内で再び topic として焦点摘出を受けることには、厳しい制限が見られる。例えば二重繰り上げ (Double Raising) は許されない。

(27) * No headway is likely to be shown to have been made.

* No heed is likely to be shown to have been paid to Cassandra.

もし、Chomsky Adjunction の一回性が多くの資料から支持されたとすると、discourse レベルでの montage を阻止する仕組みは次の方向に求められるのではないと思われる。

(28) (a) CA によって生成された主要部 (NP だけに限られない) 以外の同一文中の構成要素は、意味素性の転移を受けない。

(b) CA によって与えられる配置構造以外の構造が文間に存在しても、Montage 操作は空虚な適用 (vacuous application) しかできず、文体上の効果に影響を与えることはない。

(28)(a)は montage の最大領域を決定するものであるが、転写変形が二重結節にも及ぶことが深層的文体に具体的に存在するかという問題や、(28)(b)の「空虚な適用」の実相を説明する規準の発見は、今後の問題として残されている。本稿は文体特徴の解明を試みる意味論として、英語の形式上の特徴が決定された時 (Montage I)、劇的效果をもたらす意味素性あるいは image の転移が行なわれる仕組み (Montage II) について提案を試みたものである。 以上

REFERENCES

- Anderson, J. (1971), The Grammar of Case.
 Bach, E. (1974), Syntactic Theory. Holt, Rinehart and Winston, Inc.
 Bresnan, J. (1974), "The Position of Certain Clause-Particles in phrase Structure," in Linguistic Inquiry, 5(4), 614-619.
 Bettetini, G. (1973), The Language and Technique of the Film. Mouton.
 Chomsky, N. (1965), Aspects of the Theory of Syntax.

- _____ (1970), "Remarks on Nominalization," in Jacobs—Rosenbaum (eds.)
- Fauconnier, G. (1971), Theoretical Implications of Some Global Phenomena in Syntax. Ph. D. dissertation.
- Jackendoff, R. (1974), "A Deep Structure Projection Rule." in Linguistic Inquiry, 5(4), 481—505.
- Katz and Fodor. (1963), "The Structure of a Semantic Theory," in Fodor—Katz (eds.)
- Katz and Postal. (1964), An Integrated Theory of Linguistic Description.
- Katz, J. (1966), The Philosophy of Language.
- _____ (1971), "Generative Semantics is Interpretive Semantics," in Linguistic Inquiry, 2(3), 313—331.
- _____ (1972), Semantic Theory.
- Kennedy, A. (1975), Six dramatists in search of a language. Cambridge University Press.
- Leech, G. (1974), Semantics. Penguin Books.
- Postal, P. (1970), "On the surface verb 'remind'," in Fillmore—Langendoen (eds.)
- _____ (1974), On Raising. The MIT Press.
- Ross, J. (1967), Constraints on Variables in Syntax. Ph. D. dissertation.
- _____ (1973), "A Fake NP Squish," in New Ways of Analyzing Variation in English; Bailly—Shuy (eds.)
- Selkirk, E. (1974), "French Liaison and the \bar{X} Notation," in Linguistic Inquiry, 5(4), 573—590.
- Seuren, P. (1974), "Autonomous versus Semantic Syntax," in Seuren (ed.)
- Weinreich, U. (1958), "Travels Through Semantic Space," in WORD, 346—366.
- _____ (1966), "Explorations in Semantic Theory," in Sebeok (ed.) 395—477.

Derivative Aspects of Linguistic Montage Phenomena

Koji Takahashi

Department of the English Language, Nara University of Education.

(Received April 28, 1975)

The topic and the status of one's interlocutors in communicative situations must of necessity influence formal grammars, and it has been pointed out that Chomsky's sentence grammar has already been replaced by discourse analysis especially among generative semanticists as a result of their concern for the presupposition and illocutionary force as global linguistic phenomena.

But while those models based on the omnipresence of discrete oppositions (K—F, Leech) are inadequate for the job, Chomsky's \bar{X} Notation is partially suggested in this paper to have strong generative capacity for some linguistic Montage phenomena of specifying the proper contexts.

Two of the crucial principles of the new framework for the phenomena are :

1. Underlying configurations for semantic montage representation are ascribed to the syntactic rules of Chomsky - Adjunction.
2. Cyclical Feature (Image) Copying applies among the network of nodes governing the derived lexical heads even in non-adjacent trees.

This hypothesis resulting from the complex and conflicting linguistic facets which await theoretical developments is based upon the assumption that the derived structures given by Chomsky - Adjunction are essentially identical with the configurations assigned by the \bar{X} schema.

It seems a reasonable requirement that we seek to construct a new semantic syntax which will capture the literature with a certain cluster of images, since we are interested not only in linguistic phenomena within isolated sentences but also in the intersentential speech acts.